

論文の内容の要旨

論文題目 ジャーナリズムにおける〈地域〉という立脚点
 —地域紙と NPO の「協働」に関する事例研究—

氏 名 畑 仲 哲 雄

本論文は、新潟の上越地方で発行されている地域紙と、同じ地域で活動する中間支援型 NPO による協働プロジェクトに関するケーススタディを通して、ジャーナリズムの規範論に〈地域〉という立脚点を設ける。そして、〈地域〉を立脚点とするジャーナリズムが、従来型ジャーナリズムの規範論の限界を超える芽をもつことを論証しようとするものである。

ジャーナリズムの規範論はこれまで、主に国家、市場、市民社会との関連のなかで論じられ、ナショナルな規模の主流メディアが対象化される傾向にあった。それに対し、本論文では、過疎や環境保全などの困難と直面する「地方」や「周縁」で発行されている小規模な新聞社が、NPO をパートナーとして、みずからの経営改善と地域の活性化に取り組む事例を分析し、これまで積極的に論じられる機会が乏しかった地域自治とジャーナリズムの関係を政治哲学の議論を援用して考察を進める。

対象は、新潟県上越市の新聞社「株式会社上越タイムス社」と特定非営利活動法人「くびき野 NPO サポートセンター」である。2 者の協働プロジェクトは 1999 年夏にはじまり、本論文執筆中の 2012 年まで 12 年以上にわたって継続している。そのプロジェクトは、新聞社が紙面の一部制作を NPO に無償提供するというものである。NPO は取材から版下づくりまで独力でおこなっており、新聞社はその紙面に一切関与していない。このプロジェクトを始めて以降、NPO は編集制作する紙面を活用して市民活動を支援し、域内の単位人

口あたり NPO 法人数を県内トップに押し上げた。新聞社も、業界全体が深刻な不況に陥っているにもかかわらず発行部数を数倍に伸ばした。

従来のジャーナリズムの規範論では、こうした事例を説明する概念や理論は十分用意されていない。このため本論文は、第 1 部においてジャーナリズムの規範論の系譜や地域研究の先行研究を概観し、第 2 部で上越の事例を直接対象にした市民メディア論や NPO 論の先行文献を検討するとともに、本事例を検討するための鍵概念や理論を整理し、研究上の問いと方法論を示した。

ジャーナリズムの営みは、西欧近代市民革命のなかで成立したため、その実践倫理には国家からの自由（消極的自由）や個人主義が深く埋め込まれている。ジャーナリズムの器たるマスメディアはみずからの市場に立脚することで言論の独立をたもとうとしたが、一部の巨大メディアが強大な影響力をもつにいたり、市民社会からの批判を招いた。そうした史的展開がジャーナリズムの規範論を、対国家、对市场、対市民社会のなかで論じることを促したことには意味がある。

しかし、20 世紀後半から「政府の失敗」「市場の失敗」を教訓とする欧州では、国家をまたぐ分権策が試行され、日本政府では「小さな政府」へと舵が切られた。大規模な市町村合併が断行され、「周縁」の地域は分権改革の最前線に立たされた。他方、社会学における地域研究において、メディアの問題が論じられることはあったが、ジャーナリズムの機能や役割に言及するものは多くなかった。いっそうの分権自治が求められる状況下で、地域のジャーナリズムにはどのような規範が必要となるか、というのが本論文の中心命題である。

筆者は、新潟県の上越地域における新聞社と NPO との協働実践に着目した。この事例は、量的な規模としては大きくないが、質的にみれば重要な問いをいくつも含んでいた。本論文が立てた問いは、新聞社と NPO の協働がどのように成立し、なぜに長期継続したのかということと、地域ジャーナリズムにひとつの定義を与えることであった。それらを検討することでえられる知見から、〈地域〉を立脚点とするジャーナリズムの規範を検討しようと試みた。

先行文献は、協働成立の条件として、経営危機にあった新聞社が経営でこ入れのため NPO に紙面づくりを要請し、広報手段を必要としていた NPO のニーズとマッチしたことが指摘しており、両組織のトップが同一人物であったために橋渡しが可能であったと論じていた。しかし本研究はそうした視点を一步すすめ、以下の要因を呈示した。ひとつに、新聞社が地域社会における自分自身の役割を見つめ直し、NPO 側もメディア・リテラシーを高めた

ことである。また、新聞社と NPO のトップが同一人物であったことが必ずしも協働実践にとっての必要条件ではないことも分かった。

協働が長期継続した要因については、新聞社のジャーナリズムが権力監視 (watchdog) 的なものから善き隣人 (good neighbor) 的なものへ変化したことや、NPO が制作する紙面が新聞社の論理に巻き込まれずに独立していたこと、そして NPO が独自の社会貢献的な広告モデルを開発したことが考えられた。また、上越地域では大規模な自治体合併がおこなわれ、NPO や住民自身が自治に関与し、行政が供給してきた福祉を補完することが要請された。そうした社会構造の変化が、新聞社と NPO の双方に共通の目標——地域の利益や共通善——を重視する思考をもたらしていた。

ただし、協働プロジェクトが成立・継続するにはいくつもの障壁があった。もっとも深刻だったのは新聞界に根強い「編集権」問題であった。言論の独立性を重視する新聞社が、外部組織に紙面の一部を委ねた上越の新聞社は、主流メディアのジャーナリズムたちからジャーナリズムの規範から逸脱したと批判された。NPO に対しても営利企業の下請けがあるかのような誤解がもたれた。他方、協働に取り組んだ新聞社と NPO の担当者に自信を与えたのは、NPO 研究のパートナーシップ論であった。上越の協働事例は NPO 界では高く評価され、思想的な指針が与えられた。また、新聞社と NPO の両組織のトップを兼ねた人物の思想が、コミュニタリアニズム思想に親和的で、それらが難局を打開する支えとなっていたことも判明した。

このほか、事例分析から、上越の協働実践が 1990 年代の米国で起こったパブリック・ジャーナリズムの到達点を超える事業の継続性を獲得していたことや、NGO/NPO のアドボカシー論に接合することも知見として得られた。上越の協働事例は新聞社と NPO が対等なパートナーシップによって成立しており、両者の営みをひとつのメディア実践として把握される。NGO/NPO のアドボカシーが職業ジャーナリストの限界を補完しうることもわかった。さらに、分権型の狭い地域社会においてジャーナリズムには watchdog よりも good neighbor が求められるのではないかという仮説も導出できた。

これらの知見から本論文は、これまでジャーナリズムの規範論から注目される機会が乏しかった〈地域〉を立脚点とするジャーナリズムの理論が必要であると主張し、〈地域ジャーナリズム〉を以下のように定義した。すなわち、地域ジャーナリズムは、地域社会を立脚点とし、インフォーマルなセクター（市場、アソシエーション、コミュニティ）と共助的な関係を築き、善をもたらすことを志向するメディア活動である。それはナショナルな主流ジャーナリズムを縮小したものではなく、よその地域とつながり、国家の枠を越える

という意味で、トランス・リージョナル、トランス・ナショナルな広がりをもつ。

各地の小規模なマスメディアは、まちづくりや地域メディア論、市民メディア論のなかで対象化されることはあっても、ジャーナリズムの規範論から論究される機会に乏しかった。だが、これまで集権的であった統治形態が分権的なものへと移行していくにともない、ジャーナリズムの規範論には、新たな領域の開拓がもとめられる。ひとつの重要なテーマは、小規模なマスメディアやジャーナリストが地域の自治とどうかかわっていくかについての理論である。

市町村合併によって作りだされた基礎自治体には自立が、住民には自治への参加や自律がもとめられる。分権的な統治形態の下では NPO を中心とした市民活動団体や町内会などの地域団体が、行政機関によって供給されてきた福祉資源を補完する使命を担いつつあり、地域のジャーナリストは、全国メディアのジャーナリストとおなじく「客観的」で「バイアスなき」観察者ではいられない。上越の事例では、紙面の一部を NPO に提供したことが、主流ジャーナリズムの規範からの逸脱とみなされたが、それは見方を変えれば、〈地域〉に立脚するジャーナリズムにオルタナティブな（もうひとつの）方向性を示す。ジャーナリズムの規範は、かならずしも国家や市場、市民社会から導出されるだけではなく、〈地域〉を起点に構築することが必要なのである。

上越の協働プロジェクトは、ジャーナリズムと地域自治をめぐる最先端の実験といえる。人口約 28 万 5000 人、世帯数約 10 万 2500 の上越地域（上越・妙高・糸魚川 3 市）は、けっして特異な地域ではなく、過疎や高齢化に悩む典型的な「地方」である。だが、「地方」は分権政策の最前線に立たされており、地域のジャーナリストに求められるのは、功利主義的自由主義に固執する主流ジャーナリズムの規範ではなく、いま眼前にある地域の危機を克服していくための実践であり、そこにはコミュニタリアニズムの哲学はジャーナリズムの規範にとって指針を示すものとなる。

地域ジャーナリズムは、主流ジャーナリズムからは、小さな営みのようにみられるかもしれない。だが、〈地域〉を立脚点とするジャーナリズムは、主流ジャーナリズムの限界を超える芽をもち、それを実証的に論じたことが、本論文のジャーナリズム研究への貢献となるろう。